

<前回：近代文学4・ロシア文学>

(1) ロシア文学とロシア正教会

1. ロシア社会の後進性への問題提起と知識人(作家を含めた)の無力感
「無用の者」(ツルゲーネフ)、社会変革(近代化・ヒューマニズム)の意識
2. スラブという意識(汎スラブ主義 cf.ゲルマン)とロシア正教会の伝統

(2) ドストエフスキー(1821-1881)

3. 神の死、無神論との関わりにおける宗教的生。近代世界における伝統の解体(宗教との関わりで言えば世俗化)が、何をもたらしたのかを、突き詰めて考える。そこから宗教性を問い直す。人間の苦悩は社会制度の改良では対処できない、より根本的なところから生じる。キリスト教的にいえば、「原罪」。神を否定することが魂の再生を妨げる。
6. 『罪と罰』: ラスコリーニコフ、金貸しの老婆、ソーニヤ
非凡人(「いっさいを許された」英雄)と凡人(群衆)
6. 殺人と大地 → ロシア正教の宗教性、大地と女性のモチーフ
7. 『カラマーゾフの兄弟』: ドミートリイ、イヴァン、アリョーシャ、ゾシマ長老
8. イヴァン・カラマーゾフの超人哲学、無神論

・劇詩『大審問官』

- 宗教制度としての教会とイエス(再臨のキリストと対立する制度としての教会)
- ・予定調和的神義論への抗議: 罪のない子供たちに加えられた残虐に対して語らえる「永遠の調和」

(3) トルストイ(1828-1910)

9. 『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』。宗教的な小作品群・民話集、『懺悔』
10. トルストイ主義、キリスト教的アナキズム。特に、『アンナ・カレーニナ』(1875-77)後に、農民的無政府主義、悪への無抵抗を唱え、国家、教会、私有財産の否定に達する。世界的な影響。「愛と無抵抗主義——ガンジーへの手紙」(1910)
11. 短編作品『光あるうち光の中を歩め』(1893、新潮文庫)
時代: 古代キリスト教の時代、主人公: パンフィリウスとユリウス、青年から老年へ
16. トルストイのメッセージ: 無駄な人生、遅すぎた人生などない。
キリスト教的ヒューマニズム: キリストはあなたと共におられる、だから勇気を出して、「光のあるうち光の中を歩め」。自分らしく生きることに遅すぎるということは決してない。これは、トルストイが理解したキリスト教のメッセージの核心と考えて良い。
17. 近代批判: 所有・私有の問題。
・「人にはどれほどの土地がいるか」(『トルストイ民話集 イワンのほか 他八篇』岩波文庫)

12. 近代文学5: 日本文学

(1) 聖書から日本文学へ

1. 宗教と文化→キリスト教(聖書)と近代西洋文学
→ 近代日本: 近代日本は西欧近代と接続されている。
2. 北森嘉蔵『神の痛みの神学』新教出版社、1946(講談社、1981)
「精神」は、ともしれば国人のうちの上層の者・教養ある者・修養を積める者のみの

所有であて、庶民のものではない場合がある。庶民には「精神」を教え込まねばならぬと考えられるのはこの為である。……下層の者・教養なき者・修養を積みぬ者、そして宗教心もなき者——かかる最も低き者さえも偽らぬ純粋さにおいて所有する如きところ、このところこそ国人の心であり、真実の心である。」「かかる国人のこことは何によって表現されるであろうか。いうまでもなく文学によってである。」(205)

3. 「旧約聖書は特に近代詩への影響が大きい。日本の近代詩壇における最初の個人詩集とされる湯浅半月『十二の石塚』は、土師記を素材の中心とし、さらに、訳文に高い評価を受けたイザヤ書、詩篇、雅歌は、島崎藤村『若菜集』『一葉舟』をはじめとし、北原白秋『邪宗門』にいたるまで、文章、情緒において影響を与えているのである。」(田中良彦、67)、

「太宰と聖書との関係が深まるのは、一九三五(昭一〇)年、内村鑑三の著書から強い影響を受けてのことである」、「武蔵野病院入院」(70)、「HUMAN LOST」「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなきの程の鮮明さをもて、はつきり二分されてゐる」(72)、「水の火よりも勁きを知れ。キリストの嫋々の威厳をこそ学べ!」(73)

・湯浅吉郎(半月)(1858-1943):同志社神学科→アメリカ留学(旧約聖書・博士号)

・北村透谷(1868-1894)

・島崎藤村(1872-1943)

・太宰治(1909-1948)

4. 内村鑑三(1861-1930)・無教会と日本文学:有島武郎(白樺派。1878-1923)の場合。

札幌農学校に進学し、キリスト教の洗礼を受ける。内村鑑三の影響。欧米留学後にキリスト教から離れる。『カインの末裔』(1917)

5. 夏目漱石(1867-1916)

・漱石が使用した聖書:改定訳(Revised Version、1898)

・「漱石が線を付したところをみると、男と女、親と子、結婚にかかわる聖句が目立つ点である。漱石の聖書によってみるかぎり、漱石と聖書との関係は、男女、夫婦をめぐる問題、そこに集約されている人間の罪の問題であったような気がしてならない。」(鈴木範久)

↓

近代社会・近代人の宗教性

6. 現代作家

・椎名麟三(1911-1973):1950年、キリスト教に入信(赤岩栄より洗礼)

・木下順二(1914-2006):洗礼を受けるが教会より離れる。

・三浦綾子(1922-1999):1952年、結核療養中に洗礼

・遠藤周作(1923-1996):

・小川国夫(1927-2008):1946年頃、カトリックの洗礼。

(2) 芥川龍之介(1892-1927)

7. 「芥川龍之介とキリスト教との触れ合いについては、まず青年期にさかのぼって、芥川の残した習作や書簡等を通して読みとることが出来る」「習作「老狂人」(7)、「中学時代に郷里の松江教会のバイブルクラスに通っており」、「室賀文武」「無教会主義のキリスト者」、「大正三年頃」「基督に関する断片」「はじめて『新旧約聖書』を熟読」

8. 「西方の人」「続西方の人」(1927)

- ・「聖書を熟読し、キリストという鏡の中に自分を発見している」「ジャアナリスト兼詩人」「人の子」「私生児」「貧しい人」「民衆」。「芥川は自分自身を「ジャアナリスト兼詩人」であり、狂気の母を持ち出生の秘密を持つ「貧しい人」「民衆」に近い者であり、キリストが指し示した「現世の向こうにあるもの」、「未来」を夢見る「無限の道」を走る人であると思っていた」(281)
9. 「1 この人を見よ：わたしは彼是《かれこれ》十年ばかり前に芸術的にキリスト教を——殊にカトリック教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下 | 杢太郎《もくたらう》氏の播《ま》いた種をせつせと拾つてゐた鴉《からす》に過ぎない。それから又何年か前にはキリスト教の為に殉じたキリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。」
- 10 「彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジャアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「予言者」は彼以後には流行してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かさずであらう。彼は十字架にかかる為に、——ジャアナリズム至上主義を推《お》し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。ゲエテは婉曲《ゑんきよく》にキリストに対する彼の軽蔑を示してゐる。丁度後代のキリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。——我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるキリストを求めずにはゐられないのであらう。」
11. キリシタン物、殉教者：「尾形了齋覚え書」(1917)、「奉教人の死」「邪宗門」(1918)、「きりしとぼろ上人伝」「じゅりあお・吉助」(1919)、「黒衣聖母」「南京の基督」(1920)
12. 「奉教人の死」：「見られい。「しめおん」。見られい。傘張の翁。御主「ぜす・きりすと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身に浴びて、声もなく「さんた・るちや」の門に横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣《ころも》のひまから、清らかな二つの乳房が、玉のやうに露《あらは》れて居るではないか。今は焼けただれた面輪《おもわ》にも、自《おのづか》らなやさしさは、隠れようすべもあるまじい。おう、「ろおれんぞ」は女ぢや。「ろおれんぞ」は女ぢや。見られい。猛火を後にして、垣のやうに佇んでゐる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに由つて「さんた・るちや」を逐《お》はれた「ろおれんぞ」は、傘張の娘と同じ、眼《ま》なごしのあでやかなこの国の女ぢや。」

(3) 遠藤周作 (1923-1996)

13. キリスト教と女性的なもの(女性一身体・物質一悪)

正統キリスト教における三位一体のもつ深層心理学的な問題

母性的なものの欠如、悪の問題を組み込めない神学理論。

↓

ユングのキリスト教理解(あるいはキリスト教批判)：

神概念における女性的なものの欠如。悪の四位一体。

遠藤周作のキリスト教

14. 「私の考えている宗教というものに、二つの種類がある」、「一つは父の宗教であり、一つは母の宗教である」、「父の宗教というのは、神が人間にとっておそるべきものであり、またその神が人間の悪を裁き、罰し、怒るような神である」、「母の宗教というのはそうではなくて、ちょうど母親ができのわるい子供に対してでもそうであるように、神

がそれをゆるし、神が人間と一緒に苦しむような宗教である」(遠藤「異邦人の苦悩」、149頁)。

「私は自分の中に長い間、距離を感じていたキリスト教が、実は父の宗教の面をヨーロッパの中で強調されすぎていたために、私にとって縁が遠く、キリスト教のもっているもう一つの母の宗教の面を切支丹時代の宣教師からこんにちに至るまで、あまりにも軽視してきたために、われわれ日本人に縁遠かったのではないかと思うようになった」(同書、150頁)。

→ 遠藤周作文学の基本構想：父の宗教から母の宗教への転換。

これは、キリスト教思想の観点からいかなる評価が可能だろうか。

<参考文献>

1. 安森敏隆・吉海直人・杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社。
2. 鈴木範久『聖書の日本語 翻訳の歴史』岩波書店。
付章「聖書と日本人」、「夏目漱石」
3. 鈴木範久監修、月本昭男・佐藤研編『聖書と日本人』大明堂。
田中良彦「聖書と日本文学——太宰治を中心に」
4. 米井力也『キリシタンと翻訳 異文化接触の十字路』平凡社。
5. 高柳俊一『近代文学のなかのキリスト教』南総社。
村松定孝「日本近代小説とキリスト教——露伴・鏡花・春雨を中心に」
江頭彦造「大正詩歌の宗教性——斎藤茂吉と八木重吉の場合」
6. 鈴木範久・田中良彦編『対照・太宰治と聖書』聖公会出版。
7. 佐古純一郎・佐藤泰正『漱石 芥川 太宰』朝文社。
8. 赤木善光『漱石と鑑三——「自然」と「天然」』教文館。
9. 曹紗玉 (Cho Saok)『芥川龍之介とキリスト教』翰林書房。
『芥川龍之介の遺書』新教出版社。
10. 加藤宗哉・富岡幸一郎編『遠藤周作文学論集 宗教篇』講談社。
11. 小野寺功『増補・大地の文学 賢治・幾多郎・大拙』春風社。
12. 日本キリスト教文学会：<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~takeno/noticel.html>